

生死一如

―特別攻撃隊戦記(二)―

茨城県 長沼武治

神雷桜花第一陣の出撃

昭和二十年三月十七日の敵艦載機の攻撃により宇佐空ばかりでなく、九州各基地の緊迫度が高まる。艦載機の行動範囲に敵空母がいることは察知出来た。当時、日本海軍には「彩雲」という高度一万メートルで飛行し、敵グラマン戦闘機に「おいで、おいで」をしながら索敵可能な偵察機が誕生していた。上層部では「彩雲」の航空写真を参考に作戦策を練っていたと思う。

私等は短期日の間に、鹿屋、宮崎、宇佐航空隊と九州各地の基地を一巡したが、折しも、敵機動隊が近海に侵入、沖縄列島上陸必至の状況になって、当宇佐空も一昨日空襲を受けたが、昭和二十年三月十九日、神

雷桜花第一陣に出撃命令が出た。

指揮所には相変わらず「非理法権天」の墨蹟鮮やかなのぼりがひらめいていた。悲壮な隊員達の^{まこじり}眦を決した総員整列、そして命令の伝達、二十七機からなる一式陸攻M2母機部隊第七二飛行隊の轟々の出撃である。宇佐空の砂塵を蹴って鹿屋に向け飛び去った。第七〇八飛行隊の我々はそれを見送った(出撃機数、月日は部隊史の記録と私の記憶に若干の違いあり)。

二十一日、野中五郎隊長の率いる二十七機(十八機)は、鹿屋で「桜花[⊕]」を搭載して出撃したが、それを掩護する戦闘機はたった二十機だったと聞く。我が戦隊は数倍の敵戦闘機の迎撃に遭い、全機その餌食となり、一瞬にして百数十人(野口五郎少佐以下一五九人戦死)の犠牲を出したと、宇佐空で私は聞き愕然とした。

出陣に当たり、野中隊長の訓示は「沖縄周辺の敵艦船に殴り込みをかける。本日のために自重して来た我々である。いよいよ今日が湊川の決戦である(南北朝時代楠木正成以下の戦死)。我が中攻隊が戦闘機隊

を掩護するような作戦は、日本海軍始まって以来のものである。しかし少しも泡食うことはねえ、者共統「け、終わり」と例のベランメエ調が叱咤した、と、鹿屋にいた私は出撃の様子をそのように聞いたのである。これは、野中隊長が憤懣やる方ない気持ちで、航空艦隊司令部の航空戦に対する無知、無能、無策に対し、死をもってした反抗の言葉であつたと思う。

この桜花攻撃を成功させるためには、一時的に制空権を確保するため、攻撃機十八機の数倍、少なくとも百機を必要とするというのが岡村司令以下首脳の一致した意見であつた。それが、止むを得ない事情があつたとはいえ全機を失う結果となつた（離陸直後の接触事故、エンジン不調で引き返した二、三機は帰つたと聞く）。この悲壮な犠牲を思うとき、この仇は必ず打たねばとの怒りを感じたのは私一人のみではなかつた。

宇佐空は湿つた空気に包まれて、野中一家の生前を語り合つていた。再会を喜び合ひながら、鈴木光雄、元親伝、棚橋芳雄、竹中光男、木村元一の同期生が散

華してしまつた。そして松岡兵曹もである。

我が隊は小松基地に転進を命ぜられた。転進という言葉はいいけれど、実際は逃げて来たのである。三月二十五日ごろ、第七〇八、第七二一飛行隊は宇佐で夜間攻撃隊を編成したらしい。私は基地移動したが兵舎が無いので、弁慶の勸進帳で有名な安宅の関に近い安宅小学校の講堂を宿舎に借用していた。

北国の飛行場には残雪があり、我々は毎日飛行場で双発の一式陸上攻撃機の飛行隊で、夜間航法、洋上航法の訓練をした。これは主に偵察員の訓練で、風向風速、高度、温度差による誤差修正、風速実速を加味した航跡を図板上に表すものである。それと相俟つて操縦員の発着訓練を行う。小松基地での使命は、爆薬だけで一トン、全機重量二トンもの通称大特攻機「桜花」を積載し、敵上空で投下するのであるから、以ての訓練はしなくてはならなかつた。

飛行隊は一式陸上攻撃機という双発の飛行機で編成する。操縦員は主と副の二人、偵察、電信、電探、攻撃、搭乗員の計七人、一番機になると小隊長として士

「官一人が乗ることもある。「桜花」は、失速速度一六〇ノットであり、母機は投下時、一六〇ノット以上の速力を出さねば、子供「桜花」は失速する。エンジンは無いため加速度によって飛行するからである。高度は一応五千メートルを保持するよう指示されていた。その場合、高度の約三倍を飛行することができ、万一目標に到達できない場合を考慮して、ロケット三本を装備して、これを発射推進する仕組みになっている。主操縦員が倒れた時は、副が操縦桿を取る。「桜花」の操縦員が撃たれた時は、母機の操縦員が「桜花」を操作することに決まっていた。そのような事態を考えれば、中攻隊員も一応特攻隊員として扱ってしかなるべきではないか。

夜、総員集合があれば必ず出撃命令があり、次々と同僚が食卓から消えて行く。神雷桜花隊の攻撃方法は「桜花」が二トン以上もあるので、母機は一〇〇ノット以上の速度を保持しながら毎秒一メートル上昇する。一〇〇ノット以下では失速する。このような飛行

速度では巡航一八〇ノット以上の戦闘機に遭遇したらひとたまりもない。しかし、やらねばならぬ至上命令なのである。一機一艦の轟沈を願う我々母機は、如何にして敵艦の上空まで、この子供「桜花」を運び込むことが出来るかが問題である。兎に角、この攻撃名称を「神雷桜花作戦」といい、十号作戦まで行ったが、極めて効率は悪かった。

菊水七号作戦

四月十九日の夜、総員集合の命令があり、例の如く整列した。隊長から訓示がある。黒板に書き出された搭乗員を見て勇躍した。しかし、私は主操縦員でありながら丙十七期の太田の副となって不本意であった。「明朝〇四〇〇飛行場発進、目的地は宇佐航空隊、一応基地移動があるから、地上整備員を同乗させる。出撃機八機、各機、基地整備員七、八人くらいずつ便乗させる」と書かれていた。

四月二十日、朝から天気が崩れそう。隊長は「天気図はないが基地移動だけだから」と言った。二十三号

機には、同乗の整備員を入れ十六人。八機編隊の二小队三番機で出発順位は六番目ということになる。飛行場では、作業衣の兵隊がさかんに帽子を振って見送ってくれる。

発進後一時間を経ずして前方に雨雲が出てきた。僚機が白い雲の中に見え隠れし、時間と共に雲の層がふくれ上がり我々編隊を呑み込むようになった。出雲大社の上空あたりで空は荒れ始めた。私は飛行帽を脱いで神様に今回の出撃の成功を祈願した。戦果の無い犬死にはしたくないからである。

行く手を阻む般若のような雲群、列機を見失わぬよう密着飛行を続けた。そのうち五里霧中の単独飛行となってしまう。突然山の斜面、樹木が目の前に浮き上がってきた。主・副操縦士二人がかりでやっと上昇姿勢に機を戻したが、この時の操縦桿の重かったこと。計器飛行を続ける。機内は計器板だけが目の前にある姿勢となる。機外には真っ白な雲が踊り、雨も混じっている。「大丈夫か」「まかしとけ」ひたすら操縦員二人だけの闘いであった。

小松基地発進後既に四時間経っている。雲の合間に海が見えた。一目散に雲の切れ間に突っ込んだ。すると大きな黒い船がいた。ここで燃料不足で海へジャブンとやっても命だけは大丈夫だと思った。我々と立場の違う地上整備員も十数人いたので、その責任上特にその気になった。要するに、最後の目的達成時の死生観とは違っているからであった。

そのうち「島だ」と後部の搭乗者の声が出た。島がある。海岸線がある。町の人達が日の丸の旗を振っている。しかし、我々操縦士はそれどころではなかった。

関谷操縦員から「燃料が切れた」と知らされた。私は不時着地点を探していた。「不時着用意」を宣し降下滑空、二〇メートルの高度でスイッチオフ、脚は出さない胴体着陸である。左翼端が砂浜に着くよう着水した。ジャブジャブ、ガツーンとドシン、後席にあったバッテリーが操縦席の後ろまで飛んで来た。天蓋を開け「怪我はないか！」と怒鳴った。機外に飛び出して翼を渡って砂浜に降りた。

大事な飛行機を遂にやってしまった。申し訳ないと思った。しかし、全員奇跡的にかすり傷一つなかったことは不幸中の幸いであった。私も主操縦の太田も口をきくのも嫌な程疲れたのだろう。怪我人が無かったことを確かめ安心したのか、砂浜にへたへたと座り込んでしまった。同乗者は「長沼兵曹が後ろを向いて笑っていた時は、操縦員が笑っているようでは、大丈夫だと思って安心した」と言う。

基地から積んできた特別食糧も水浸しとなる。間もなく飛行機が墮ちたという話が町に広がり、土地の警防団員やら国防婦人会の人たちが肩にタスキを掛けて続々と見舞いに来てくれた。

そこは、山口県の小串という所であった。名物の夏蜜柑も沢山持ってきてくれた。「皆様御苦勞様です」と言われた時はちょっと恥ずかしい思いがした。炊き出しもしてくれ、その好意を受けることにし、飛行機から見えた陸軍の療養所で昼食を頂いた。

療養所の遇番士官が、下関の憲兵隊へも、宇佐の基地へも連絡をしてくれた。憲兵隊長の好意で、一泊休

養することが出来た。門司に渡り、汽車で宇佐に着いたのが午前九時半である。当直将校に経過を報告する。昨日小松発進の八機のうち、二機は美保空不時着、一機は我々、他の五機は無事宇佐に到着し、我々の到着を遅しと待っていると思いきや、当直将校は「御苦勞！ 中へ入って黒板を見ろ！」と言う。昨日の移動で、まともに着いたのは第一小隊の一番機のみ、第三小隊の一、三番機は、山に激突炎上全員死亡の悲報が入っていた。

四月二十一日、機を掩体壕に入れ、偽装をし、やれやれと一休みしていたら、突然、拡声器から「空襲！ 空襲！ 総員配置につけ！」の命令。B 29の大編隊が東の空から銀翼をキラキラと光らせ、飛行場目標に飛来した。弾扉が開いて、ザザーッと嵐のような音と共にドンドン、飛行場、格納庫と所嫌わず爆弾の雨である。友軍の戦闘機が何機か躍りかかっている様子だが戦果は上がらない。その中一機だけが編隊から離れたのが見えて、洋上へ消えていった。

夕方、飛行場に泊まったが、隊内は爆撃されて炊事

も出来ぬ。食事の賄いは野天でしたが、我々の宿舎は近辺の民家を借用した。しかし、昨日墜落死亡した同僚三十数人のお通夜をすることになった。飛行場から二、三キロ離れたお寺へ行った。墨を流したような真っ暗な夜だった。その間にも空襲時の時限爆弾が時折、ドカンドカンと炸裂し度肝を抜かれた。

昨日の空襲で飛行機もほとんど焼かれてしまったが、隊員の犠牲もまた大変なもので死傷白人を越したと思う。飛行靴があるので拾って見たら、中に足が入っていたり、一人の上体部が他の人の腹部に突き刺さっていたり、空襲の無惨さを、まざまざと見せられたのであった。

一刻も早く次の命令を待ち行動したいが、飛行機がないので手の出しようがない。銃をもぎ取られた蟹同然の生活であった。幸い昨日着いた一番機だけは残っていた。毎日毎夜の時限爆弾に多少ノイローゼ気味になって暮らしていたが、その一番機に同乗し小松へ引き返し、飛行機の輸送をすることになった。我が国土でありながら、制空・制海権共に敵の手中にあり、安

心して飛行ができず、ミミズクのような目付きで見張りしながら小松基地に帰った。私達が宇佐でマゴマゴしている中に、出撃して還らざる犠牲者は四十人であった。

神雷桜花八号作戦

第一号の大作戦に失敗した我が神雷桜花隊は編成攻撃を止め、一機一艦の秘策を、二号作戦からゲリラ的一機単独攻撃法に変更させたのだった。しかし、護衛も掩護もないこの攻撃は所詮どうにもならない日本の空の足掻きのほか何物でもなかった。

当直将校から「二〇三〇、総員集合、場所は講堂内」と号令が出た。一瞬シーンとなる。緊張した空気が流れて、薄暗い講堂の黒板に、出撃者の搭乗割が出る。当直下士官が「整列！ 番号！」を号令し人員を確かめる。「整列よろしい」前任搭乗員に報告する。

この前任搭乗員は鹿屋の前任搭乗員から三人目であった。誰かが「おお、今度は死ぬる！」と両拳を前に出してブルブルと伸縮して見せた。今まで七回の桜化作

戦はしているけれど小松基地から発進する攻撃命令は初めてである。隊長から命令を聞く。全員武者震いを覚える。搭乗割の出たベアの同僚を思うと何か先手を越されたような気がした。

宇佐から小松と一緒にの丙十七期の長沢政信兵曹（主操）もその一機であった。彼は私に「長沼！ 昨日、おやじとおふくろが面会に来て金を置いて行ったんだ」と、私にその百円を置いて行った。当時百円という大変なもので、我々搭乗員の一カ月の給与である。それを友にポンとくれているのである。親しい仲間として、楽しみも苦しみも、また懐も一緒であった。思えば、純真無垢という言葉そのものである。黙って死地に赴く長沢、この時私にははつきり負けたと考えた。

それにしても、今日の出撃命令を知ってか知らずか面会に来た御両親とのつながりを思うと「虫の知らせ」であったのではなからうか。長沢は志願兵で、まだ二十歳の可愛い少年であったが、この八号作戦に

殉じてしまった。

出撃したら母機もおよそ帰還は難しい攻撃であったが、六号作戦において栃木県出身の酒井敬二機が桜花隊員山際直彦機を投下、敵大型艦船轟沈の戦果を挙げ、奇跡的に帰投した。そして私は酒井兵曹にいろいろ戦場の様子を聞いて戦訓とした。

九号作戦出撃前夜

宇佐から小松へ転進して来た時は安宅の町が宿舎であった。下宿は道明さん宅である。前の作戦で私が戦死したと聞いて仏壇に線香を上げているという話も聞いたので、恥ずかしいと思ったり、お礼もしなければならぬと複雑な気持ちであった。

五月二十一日、夜七時、突然総員集合が宣せられた。偵察機「彩雲」からの沖縄周辺の敵艦船の状況を撮影した写真を見せられて吃驚した。高度一万メートルからのを拡大して見せられたのである。沖縄の島々を砂糖の塊と見ると艦船が、それに群がる蟻のようにギッシリという。今この上空から爆撃すればやみくも

に落とした爆弾でもどれかに命中すると思うほどである。これが慶良間列島周辺の敵艦船集結状況である。いよいよ沖繩上陸作戦の彼我懸命の攻防戦中である。勿論その夜出撃の命令を受けた。

出撃機数六機、ベアは七組で、私のベアは各機に分散便乗して鹿屋基地にある母機より攻撃に参加せよという命令である。私の搭乗編成割は前回七号作戦でもそうだが、また違っていた。ただ命令のままに「行け」と言われれば行くだけなのである。

「出発時刻は、九州各地の空襲が深刻なので、小松基地発進を一五〇〇とし、鹿屋到着は日没時をねらって着陸せよ、途中見張りを厳にして、最後の目的を完遂するまでは、くれぐれも注意せよ」というような、副長官岩城邦広中佐の訓示があった。

小松基地 発進

明けて二十二日、兵舎を離れるに際しては、民家の爺さん、婆さん、はては子供達まで飛行場へ通じる道々で見送りをしてくれて、両手を合わせて涙声で

「お願いします、お願いします」と拝んでくれた。私達は既に神様に祀り上げられていたのである。

その時の出撃姿は「日の丸」づくめであった。鉢巻の真ん中に日の丸、飛行服の右腕に日の丸、救命胸衣の胸と背中にも日の丸である。鉢巻は二メートル余りもあるもので、飛行帽の上から後ろで結んで、それを前に垂れ下げ、丁度それが羽織の衿のような格好になる。

額の日の丸の両側に「神雷」と書き、垂れ下がった鉢巻白布の衿の片方には「大空の浪人」「常陸の住人」などと書き、片方には自分の部隊名、階級名、(第七〇八飛行隊、長沼一飛曹)と書いて、肩から轟沈袋なるものを提げている。これにもまた名文句を書いてある。家郷から無理して調達してもらった日本刀を持参している者もいる。その姿たるや実に勇ましく、美しいものであった。白いマフラーも目にしみる程で、当時の青少年の清純さ、純朴さを物語るようでもあった。赤穂浪士の討ち入りの出姿に似ていたし、精神状態も出撃の場合誰もがそのようなものであった。

出撃人員五十数人、第七、第九号作戦に続いて二度目の出撃である私の気持ちは、常日頃と何ら変わるどころはなかったが、中には異常なまでにハッスルしていた者もいた。血走った眼、その一挙手一投足にも自分の精神の動揺を他に感知させまいとする意識が、かえって異常な元気となって表れたのかも知れない。

この第七〇八飛行隊に入籍以来、生死の境をいかに平常心でゆけるかを私なりに考え、行動してきたつもりである。その成果が第七号の時も今回も表れているのではなからうか。隊内では征く者と残る者が裏腹な気持ちで、別離の挨拶を交わす。

征く者の中には、笑っている顔の人でも「大東亜戦の終局を見て死にたい」と、心に残る一抹の未練を吐露した友も何人かいた。また「いよいよ死ぬるぞー！」と言って突入する恰好をガッツポーズで示して笑わせた友もいた。

残る者は「いつ死ぬか、いつ死ぬか」と思いつめている気持ちより、早く征ってその気持ちから解放されたい気持ちが先に立ち、「貴様、うまくやれたな」と

征く人を羨む者、いずれ死なねばならぬ運命なのだ。

いつの出撃も同じだが、「そのうち俺も行く。靖国神社のいい場所を予約しておいてくれよ」と、ほとんどの友が今出撃を前にした友への慰めの言葉であった。

当時は、出撃搭乗割も克明に覚えていたはずだが、最早戦後も遠く忘れてしまった。私は第二小隊三番機に搭乗したように記憶している。

昨夜外出から早く帰隊して、遺品箱や身の回り不要品をきれいに整理してあるので、出発の今日の仕事は何もない。それより、午前中一式陸攻M2の整備に忙しい整備兵に感謝しながら、ブラブラしていた。その時の心理はただ一刻も早く基地を発進したいと思っただけであった。

昼食を済ませて整列。こうなると後始末はすべて残る者の仕事であるので我々は何もすることはない。出撃員の見かけはのん気そうに見えるだろうが、精神状態は極限に達して踊り出しそうになっている。

一五〇〇、小松基地の砂塵を蹴って、三機また三機と離陸する。編隊を組み発進後数分にして基地上空に

舞い戻り、いつもながらの別れの挨拶のバンクをす
る。基地では「総員見送りの位置につけ！」の号令一
下、滑走路の両側、指揮前、あるいは屋上から隊員が
帽子を振り、ちぎれるほどに旗を振って別れを惜しん
でくれる。これが二度目だが、征く者、否、私には別
段の新たな感激はなかった。

一式陸攻母機六機が轟く爆音を残して、一路南の空
九州鹿屋基地へ向かう。高度五〇〇メートルをとり敵
艦載機の見張りを密にしながら、所定のコースで出雲
大社の上空を飛ぶ。第七号作戦時のお礼を兼ねて大鳥
居の上まで来た時は、第七号の時と同じく飛行帽を脱
ぎ心から作戦の成功を祈願した。

出発の天候はさして悪くなかったが、九州に入って
夕闇が迫るとともに、多少空模様が崩れ出し、雨が風
防ガラスに当たる。同乗の私は居眠りをしていたが、
一番機が小隊解散のバンクをした時目を覚ました。も
う鹿屋に着いたのかと思いい時計を見た。出発後三時間
十五分である。予定時間は三時間四十五分であったか
ら、今日は早かったなと地上を見た。下界は薄暗いが

見馴れた基地鹿屋とはちょっと山々の背景が違って見
える。

各機適当な間隔をとり誘導コースに入った。滑走路
を見たら穴だらけの爆撃の爪跡がある。爆弾の穴を埋
め戻した真新しい土が丸く赤く見えて月面を思わせ
た。

隊長機が、雨が降り暗くなってきたので鹿屋基地へ
の進入は無理と判断、不時着を決意した。そして下の
基地飛行場は出水であることを偵察員から知らされて
納得した。雨も若干強くなってきた。六機の一式陸攻
は次々と無事着陸したが、最後の私達が一番機着陸時
から大分時間も経っているので暗くなってきた。

着陸して誘導路へ入ろうとしたとき、運悪く爆弾の
穴跡へ左車輪を突っ込んでしまった。操縦員がスロッ
トルレバーを全開しても出ない。同乗の搭乗員が降り
て後押しをするがそれでも出ない。仕方なく地上整備
員の応援を頼むことになった。ちょうど一日の作業が
済んで宿舎へ引き揚げる十数人を呼び戻した。整備の
分隊士が「気をつけろと言ったのに」と大変ご機嫌斜

めだったが、そんなことは地上と空中では連絡の取りようがない愚痴である。「地上の野郎どもが勝手な熱を吹いても、どうせこっちは明日か明後日神様になるんだ、一丁勇ましいところを見せてやろうか」と、やんちゃな気持ちでエンジンをワンワンふかす。その風に吹き飛びそうになりながら地上整備員数十人が「ウンサ、ウンサ」と飛行機を押すがなかなか出そうにもない。その中の班長らしいのが手を貸そうとしない。

この野郎と違ってよく見ると同級生の野口であった。二人共に一曹である。私は彼に「明日は鹿屋から出撃だ。家へ元気で死んでいったと伝えてくれ」と頼んだ。日の丸ずくめの姿に、目だけがギョロギョロと光っている無気味な様相に、野口は慌てたらしい。私等は敵機の来襲前に出発し、翌早朝薄暗い出水空をついて飛び立った。野口は班員を連れて「帽振れ」の見送りをしてくれ、鹿屋に着陸したのは六時ちょっと前であった。

一応愛機を分散し掩体壕に誘導する。私の愛機は二七号と決まった。私が新入隊し過ぎたころとは基地

の様相は変わり悲壮な気持ちになった。いつ空襲されるかもしれない。いよいよ明日は、子機「桜花」を抱いて出撃である。あれを思い、これを思うがもう覚悟は決めていた。既に多くの上官、同期生、後輩が戦死している。沖縄の米艦船の蝟集状況は「彩雲」の航空写真で見たが、今日一日の命かとも思い、鹿屋の一夜を明かした。

飛行場大隊

満州の訓練と

比島の切り込み隊

茨城県 仁平 六三

昭和十六年九月一日午前八時、これは忘れることのできない私の入営への旅立ちの日時である。近親者や近所の方々の見送りを受け、小雨降る中簡単な挨拶をして、一路千葉県柏の第四航空教育隊へと向かった。

第三中隊永野隊鈴木班で、二、三日はお客様扱いであ